

## 特別分科会②【高大社連携キャリア教育】

### 高大社連携フューチャーセッション成果報告

～実行委員会によるセカンドステージを振り返る～

【報告者】 2021 年度高大社連携フューチャーセッション実行委員

【コーディネーター】 鮫島 輝美（京都光華女子大学 健康科学部 准教授）

【コーディネーター】 杉岡 秀紀（福知山公立大学 地域経営学部 准教授）

【オブザーバー】 滋野 哲秀（龍谷大学 文学部 教授）

新型コロナウイルス感染症の影響により、価値観や社会状況が大きく変化する中で、学び方、働き方、暮らし方の多様性が広がっている。これを踏まえた今年度の高大社連携フューチャーセッションの企画づくりを、昨年度に引き続き、高校生・大学生から構成される実行委員会形式で行った。本分科会では、この実行委員会セカンドステージの成果を報告した。

※「高大社連携フューチャーセッション」とは、高校生・大学生のキャリア発達を目的とし、世代や学校の違いを超えて、未来志向で対話・交流する高大社連携キャリア教育プログラムである。

#### 概 略

冒頭、コーディネーターの鮫島氏から、コーディネーターとオブザーバーの紹介、これまでの高大社連携フューチャーセッションについての概要紹介、本分科会の進行について説明があった。

次に、報告者である実行委員が、対面とオンラインのグループに分かれ、自己紹介を兼ねたアイスブレイクを行った。その間に、参加者は、本年度フューチャーセッション関連資料の閲覧、実行委員が作成した本年度フューチャーセッション紹介ビデオを視聴した。

続いて、実行委員個人で、ワークシートを用いて、①実行委員をやってみて、学んだり気づいたりした点は何か、②企画から実行までやってみて、難しかった点は何か、また、それをどのように解決したのか、またできなかったのか、③この学び・気づきを自分の将来の「学ぶ」「働く」「暮らす」にどのようにつなげるか、の3点について、振り返りを行った。

その後、実行委員は、グループ内で、各々の振り返り内容を共有し、ワークの全体テーマ「この企画が自分にとってどのような体験だったのか？」についてまとめた。その間、参加者は、グループワークの様子を聴講した。

全体発表では、発表ごとに他の実行委員グループとの質疑応答があり、参加者からも質問があった。

最後に、コーディネーターの杉岡氏とオブザーバーの滋野氏から講評を受け、鮫島氏からのまとめの後、本分科会を終了した。

## 全体討論の内容

本年度高大社連携フューチャーセッションは、実行委員にとって「社会人を先取りして経験し、自分の課題を発見する」体験、また「一つの課題に対して、多角的に考え、新たな価値を見いだす」体験の場となっていた。

具体的には、実行委員は、自分たちが中心となって一から企画を考えること、タイムスケジュールに合わせてさまざまなことを決定すること、多くの意見の中から一つの方向性を見いだすことの難しさや、委員同士の関係づくりから始める中で、意欲的に関わる者とそうでない者との温度差などを感じていた。同時に、それは高校での学びにおいても必要なものであり、さらに大学で何を学ぶのかを決める過程や、どのように専門性を身に付けるのかという将来設計にも通じると気付いていた。また、コーディネーター等の多くのサポートを受けながら、1つの企画を練り上げていくプロセスを踏むことで、社会に出た後に求められる能力について、具体的なイメージを持って体験できていた。

また、実行委員による企画会議は、全てオンラインで行われたが、オンラインならではの困難さや、会議で委員全員が参加できず、誰とどのように協働するのか、試行錯誤しながら決定する困難さも学べていた。

フューチャーセッション開催当日の運営では、全体の進行やファシリテーションの難しさを感じながらも、委員間で役割分担をして協力し合い、最後までやり遂げたという達成感も味わっていた。

## 到達点と今後の課題

本分科会は、実行委員自らが、今回の企画での経験を言語化する場となった。高校生の委員からは「社会福祉の新たな魅力発見につながり、今後の進路を再考したい」という発言もあった。このことから、高大社連携フューチャーセッションの目的である「高校生・大学生の立場や地域を超えて新たなネットワークをつくり、大学・社会に出てからの働き方や自身の今後のあり方などについても考える」機会となった。また、委員のグループワークでの対話・交流を視聴した本分科会参加者からは「実行委員たちが経験やコミュニケーションを通して学び、成長する姿を垣間見れた」という感想もあった。

本年度フューチャーセッションは「多様性を尊重する社会について話し合おう！～ジェンダー問題から考える日本の在り方～」のテーマで開催し、ゲスト講演の良さも手伝って、当日の参加者にとっては、社会的マイノリティーについて我が事として考える機会となり、満足度も高かった。また、実行委員の満足度も高く、チームとして力を合わせ、1つのものをつくり上げる喜びを感じていた。さらに、実行委員所属高校へのアンケートでも、参加した生徒の様子に対して「社会課題についてこれまでよりも、より深く学ぼうとする姿勢が見られるようになった」などの声が聞かれ、満足度が高かった。

本フューチャーセッション実行委員会での活動を通して、委員は、企画段階からの主体的な参画、自分の意見を発言するだけでなく、他者の意見にも耳を傾け、それらを企画に反映させる過程、また企画書の作成、広報や当日の運営など、今までにない経験に、戸惑いながらも達成感を

感じ、見通しを付けることの大切さにも気付くなど、経験の意義について考えることができた。

一方で、複数の実行委員がいるからこそ、担当に分かれて効率よく進められたと同時に、全てオンラインでの準備であったので、積極的に関わる者とそうでない者との差ができ、さまざまな意見が出て、まとめることに苦労したという意見もあった。しかし、Slack 内で適宜情報を共有したので、コーディネーター等が適切な助言ができたと考える。また、高校生が非常に多忙で、企画会議で委員全員が一度も揃うことがなく、フューチャーセッション当日も模試とバッティングするなど、日程調整が困難であった点については、今後の課題と考える。

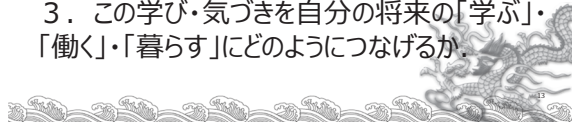




スライド 13

テーマ「この企画が自分にとってどのような  
体験だったのか」

1. 学生実行委員会をやってみて、気付いたり学んだりしたこと
2. 企画から実行までやってみて、難しかった点、またそれをどのように解決したのか、まだできなかったのか。
3. この学び・気づきを自分の将来の「学ぶ」・「働く」・「暮らす」にどのようにつなげるか。

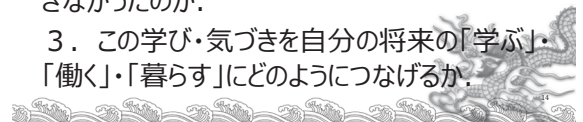


スライド 14

グループ内共有

◆ 1 テーマ × 5分 15分

1. 学生実行委員会をやってみて、気付いたり学んだりしたこと
2. 企画から実行までやってみて、難しかった点、またそれをどのように解決したのか、まだできなかったのか。
3. この学び・気づきを自分の将来の「学ぶ」・「働く」・「暮らす」にどのようにつなげるか。



スライド 15

発表の準備

20分



スライド 16

グループ発表

1 チーム 8分  
質疑応答 2分



スライド 17

講 評

杉岡秀紀（福知山公立大学）  
滋野哲秀（龍谷大学・京都教育大学）  
鮫島輝美（京都光華女子大学）

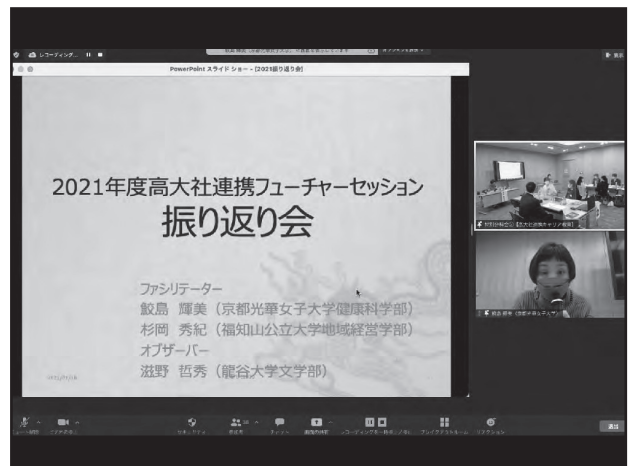




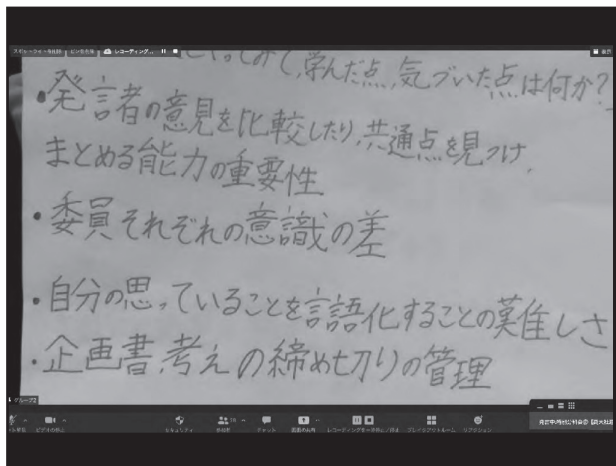
スライド1



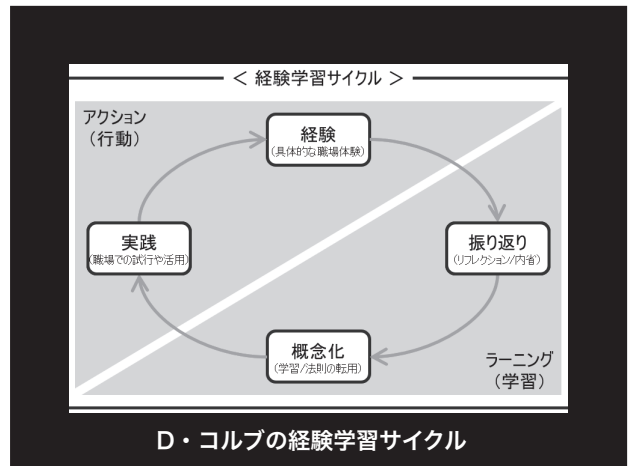
スライド2



スライド3



スライド4



スライド5



スライド6

- ①ハイブリット運営+slackの活用
- ②ニューカマーとオールドカマー（経験者）のバランス
- ③1テーマ・1ゲスト（狭く深く）

スライド7

## 総括（コメント）

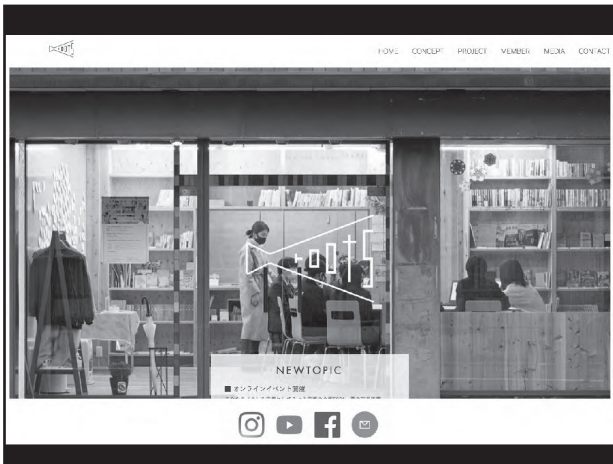
スライド8

家でもない学校でもない  
「サードコミュニティ」  
(リアル+オンライン)



ごちゃまぜの  
ミニパブリックス

スライド9



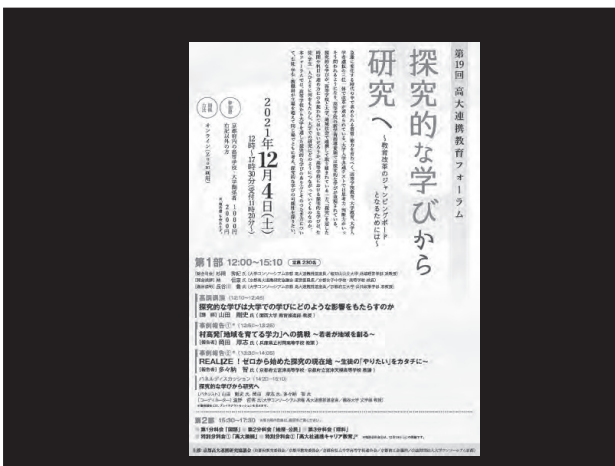
スライド10

もう一つの部活  
もう一つの実践的探究  
(プロジェクトの型を実践を通して学ぶ)



消費者視点から生産者視点へ  
※社会人の先取り

スライド11



スライド12

高大のギャップを  
当事者自らが埋める



大学・学びたいこと・自分・  
地域に対する選択肢を提供



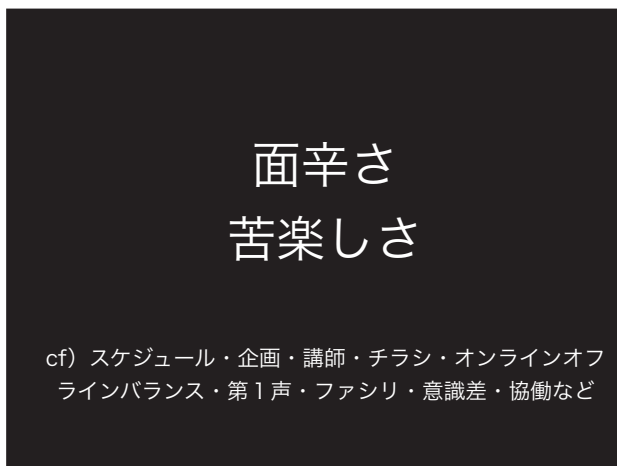
スライド 13



スライド 14



スライド 15



スライド 16

